

文芸OGネットワーク通信



Vol.6

〒101-8437 東京都千代田区一ツ橋 2-2-1
文芸OGネットワーク 代表 百瀬 好子
発行 2007.2.24

共立女子大学文芸メディア研究室内
Tel/Fax 03-3237-2681
URL www.kyoritsu-wu.ac.jp

第3回文芸サロン講座 「今日の俳句」



今回のサロン講座は、神谷くに子（俳号鳴戸奈菜）氏を講師にお迎えして、「今日の俳句」をテーマに、昨年9月16日（土）、共立女子大学本館1311号教室において開かれました（参加者35名）。

神谷氏は、昭和43年共立女子大学大学院文芸学研究科修了。母校で英文学の教鞭を執られている頃から、俳句の世界に入られ、「らん」の発行人として、また、毎年夏に松山市で開催される「俳句甲子園」（全国高等学校俳句選手権大会）の審査員をつとめるなど、現在ご活躍中です。

サロンでは、神谷氏に“俳句を長く続けているワケ＝俳句の魅力”を語っていただきました。

古くからの「俳諧」が「俳句」と称されるようになったのは、正岡子規（妹の律は共立女子職業学校卒。後に母校の教師となった。）が広めたとされる。高浜虚子の花鳥諷詠、その後、河東碧梧桐、また山頭火などによって自由律が提唱され、無季の句も作られるようになった。今日の俳句の特徴は、扱われるテーマが多様に富むことと俳句が国際的な広がりを持ったことである。前者の例を挙げると、

〔日常の景・口語表現〕

○屠蘇散や夫は他人なので好き
（池田澄子）

〔詩性〕

○頭の中で白い夏野となつてゐる
（高屋窓秋）

〔美しい句〕

○白梅のあと紅梅の深空あり
（飯田龍太）

〔音のひびき〕

○お早うと言ふはつなつの
ひびきなり（奥坂まや）

〔機知〕

○瀧壺に瀧活けてある眺めかな
（中原道夫）

神谷氏が俳句の世界にのめりこんだきっかけは、尊敬する俳句の師、永田耕衣に偶々褒められたことからとか。また長く続けられたのは俳句の深い魅力と同時に、句友との楽しい交流からとのことである。最後に神谷氏の、とくに印象に残った句を紹介する。

○青大将この日男と女かな
○さびしさに蝶や蜻蛉を生んでみる

サロンに参加された方々からは俳句をはじめてみたいという声も聞かれましたが、ご自身も俳句を嗜まれる、会員の下田静子さんから感想文をお寄せいただきました。

「今日の俳句」について

文芸サロン講座に初めて参加しました。万難を排し出席した甲斐がありました。同期生の中に俳句をしていた、或いは現在勉強中の友人にも会えて、一同、鳴戸先生のお話に共感し、得るところ多くありました。俳句は一般的には古いものだと思われがちですが、私自身も古典的詩とっておりましたが、「今日の俳句」について伺って、今まで勉強していた俳句に新しい世界を拓ける事ができそうでした。読むことも大事ですが実際「生のお声」を聞きながらの勉強は得るところが多くありました。

先生は口語表現の例句、詩性のある句、根源俳句、ひびき、機知のある句、戦争俳句の例句をあげられ納得しました。たとえば
野菊道笑ひおくれし写真です 清水徑子
夢の世に葱を作りて寂しさよ 永田耕衣
日の丸は血の丸八月十五日 鳴戸奈菜
私の好きな句を記しましたが、他にも沢山ありました。

講義の後で参加者の中から俳句に関する核心をつく質問が多くあり、先生は気軽に、でも丁寧に答えられ、時間を惜しみながら終了しました。有益な一日でした。帰りの電車の中、そして帰宅しても講義メモを繰り返し読みました。浜松市から出席した友人も同様だったとの事です。皆様に深謝。

下田静子（昭和32年卒）

“大和撫子”事情

—共立祭壇間見記—

10/14(土)・10/15(日)

「文芸 06 ネット」立ち上げ以来、四回目の共立祭参加。我等老嬢「大和撫子」達は展示に、バザーにと気をはいているが、現代っ子の「大和撫子」の活躍振りをウオッチングしてみた。10月に学園から『学園報』が全卒業生に郵送されたので、大学の再編成の状況は既にご存知であろうが、本館(15階建)に集約されたかたちでの共立祭は、1Fロビーまでフルに利用され、エレベーター前の長蛇の列に象徴される盛況であった。



本館のロビー風景

グラウンドの無い本学は、運動関係の部やサークルはほとんど模擬店の形で参加。エキジビションや招待試合が出来ないのは何とも気の毒としか言いようが無い。

全会場を巡った中、秀逸な展示は当然と言えば当然なのだが、各ゼミナールの展示であった。

1004室 林田ゼミ グラフィックのHIROBAでは「世界の貧困と私たちの生活」(3年次)「CI計画」というテーマで的確なメッセージを伝えていて、非常にインパクトがあった。

家政学部生活美術学科 NEWプロダクトデザイン'06(青木ゼミ)は 展示『世界の貧困と私たちの生活』「歯ブラシとゴミ箱」でユニークな形の歯ブラシと工夫を凝らした分別ゴミ箱が並んだ。



その他「れもん舎」の創作絵本や有志参加の英語の絵本など努力の光るものがあった。

仏文学コースの有志によるフランス語劇「LES AVENTURES DE YONASHI TARO」は日本の昔話「桃太郎」をもとに、言葉遊び的要素を盛り込んだコメディに仕上げられていて、楽しませていただいた。



フランス語劇上演

本館 展示発表 (大学・短大)

('06年度共立祭パンフレットより)

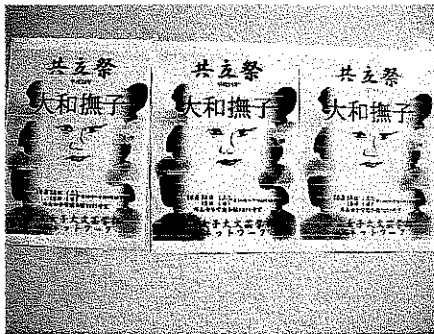
| 2F | 3F | 5F | 13F |
|--|---|--|---|
| 剣道部 模擬店 バドミントン部 模擬店 ラクロス部 模擬店 | 303室 雑学研究会 305室 絵本制作サークル れもん舎 307室 華道部 早月流 308室 美術部 309室 華道部 小原流 311室 華道部 杏流 312室 Natural food circle 模擬店 314室 まんが研究会 模擬店 ラウンジ 社会福祉サークル 模擬店 | 510室 生活科学科(有志) 517室 陶芸研究会 模擬店 521室 ホステリングクラブ 模擬店 ラウンジ 家政学部 食物栄養学科(有志) CUP's 模擬店 | 1305・1313室 家政学部 生活美術学科・絵画コース(須田ゼミ) 1307室 マンドリンクラブ 1309室 文芸学部 チンパ会(有志) 1311室 文芸06ネットワーク(有志) ラウンジ 文芸学部 仏文学コース(有志) 洋楽編曲: テアートルフランセ 14日(土) 13:00~、15:30~ |
| BT01室 14日(土) 14:30~ 運営委員会 ゲスト企画 博多華丸・大吉トークショー 15日(日) 11:00~ 運営委員会 ゲスト企画 小出恵介トークショー | 401室 茶道部 403室 胡弓部 405室 文芸学部 英米文学演習IC(有志) | ラウンジ 写真部 ラウンジ ファッション研究会 | 1524A・B室 オープンキャンパス (大学・短大[看護学科を除く]) 14日(土)・15日(日) 10:00~15:00 個別相談 (学部・学科内容/入試状況等) 入試資料の配布・簡章 募集要項(簡章を含む)の無料配布 |
| 運営委員会 ステージ企画 運営委員会 夜祭企画 運営委員会 グッズ企画 共立祭てめくい等の販売 来場者受付 | 407室 硬式野球部 模擬店 409室 看護学科(ブチナース) 413室 華道部 池坊 415室 文芸学部(有志) CAFE aperitif 模擬店 | 1004室 家政学部 生活美術学科 グラフィックのHIROBA(林田ゼミ) 1006室 家政学部 生活美術学科 NEWプロダクトデザイン'06(青木ゼミ) 1008室 映画研究部 1010室 放送研究部 ラウンジ 家政学部 生活美術学科(海崎ゼミ) | 募集要項(簡章を含む)の無料配布 10:00~15:00(雨天中止) |
| 103室 運営委員会 桂由美プライダル展示企画 | 学 食 14日(土) サウンドクリエイティブ 15日(日) フォークソングクラブ | | |

- ・講堂発表
- ・グラウンド
- ダンスサークル
- 競技ダンス部
- ファッション研究会
- チアリーダー部

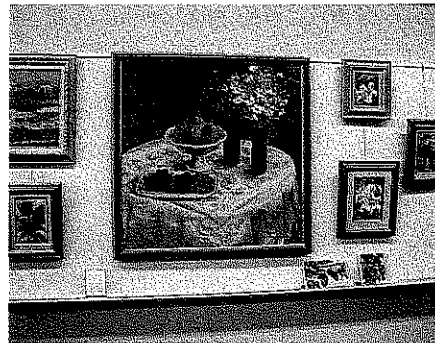
を祭りとして楽しんでいる現代の学生たちも本質的には何も変わっていないのではないかとふと感じた。ビジュアル化が進んで、活字ではなく、視覚、聴覚に訴えてくるも

のしか受け取らなくなっていると、ややもするとマイナスに捉えがちであるが、いやいや現代の若者達はわれわれの世代よりイメージ化が豊かに、多様になっている。インタ

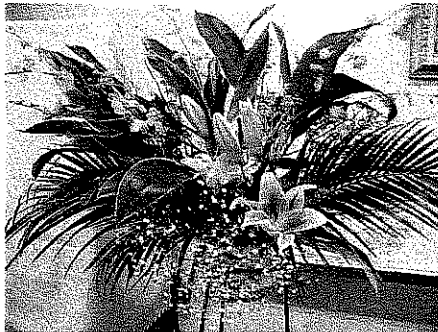
ーネットやデジタルを駆使して、精神的にも豊かな人間や社会人が大学から育っている事を確信して、岡目八目的共立祭めぐりは終了。会員の皆様も来年は是非ご自身の目でご覧下さい。



ポスター製作 今野美保子 (S35 卒)



油絵 矢田智子 (S33 卒)



花 斉藤京子 (S33 卒)



文芸OGネットワーク 本館 1311 創作品の展示と即売



陶芸 仙葉弘子 (S33 卒)



'06 年度共立祭
パンフレット

「演劇資料デジタルアーカイブ構築の調査研究」この長々しい名前が、OG ネットが協力してすすめている資料整理につけられた名称である。アーカイブとはもともとは古文書を保管する文書館あるいはその保管文書をさすのだが、最近では、パソコンでファイルをまとめる保管場所、としてひんぱんに耳にする言葉である。確かに明治・大正からの資料をまとめる仕事としてはぴったりの表現であろう。そしてまた3号館大学院棟5階は、リニューアルされていく他の建物や研究室と肩をならべることもなく昔のままであり、アーカイブの名にふさわし

おれらなごんアーカイブ

い、と言えないこともない。デジタル化は早急にすすめねばならないことである。昨年春にはいよいよパソコンが資料室にはいった。まずは北見治一氏の蔵書目録を打ち込んでいる。パソコン担当はできれば遠慮したいというメンバーが多いので、どうしても若い人、あるいは定年後協力してくださってい

る方たちにかたよってしまうのがつらいところである。4月から研究室では築地小劇場と文学座の舞台写真をスキャンする計画があるときいている。資料の間にはさまっている劇評のコピーなどはもう字がうすくなって見えない。劇団通信も廉価な紙質のものは劣化が早く切れかかっている。すべてをデジタル化することは無理としても、とにかくアーカイブ構築はお金がかかることである。いつまで続けられるのかしら、と不安がよぎるけれども、こつこつすすめていけば陽のあたる時がくるにちがいない。

サークル探訪 マンドリンクラブ

会場の暖かい拍手に包まれて、明るいステージには満足とほっとした笑顔で答えるマンドリンクラブの面々。共立女子大学マンドリンクラブの第39回定期演奏会は、2006年11月9日、三鷹市芸術文化センター風のホールで開かれた。

調弦のための2回の休憩を挟んで三部にわたる約2時間、アンコール曲も入ると10曲の演奏は無事終了した。

マンドリンクラブは、卒業したメンバーの中にはお母さんが学生時代このクラブのメンバーだったという人もいたというから、共立女子大学の数あるサークルの中でも長い伝統を持つクラブのひとつ。現在部員は1年生7名、2年生4名、3年生3名、4年生1名の計15名。一時は4名ほどに減った年もあったくらい、ここ何年かは部員数一桁だったのが、今年は、どっと1年生が参加してくれて、活気を取り戻している。「今年から、学生が神田校舎に集合されたおかげです」と、部長の村山千尋さん。

しかし、新入部員のほとんどはマン

ドリンという楽器は初めてという人が多く、練習は弦を押さえることから始めるので、前期は基礎練習に明け暮れる。その間、簡単な曲も入れての練習となるが、定期演奏会に向けて何曲かを仕上げていくのは大変だ。

練習は週2回、1回の練習時間は2時間くらい。休みの期間は朝から夕方5時ころまで集中して行う。練習場は3号館の教室だが、今年は3号館の改修工事で使えない時期が長かったの、練習場所を求めて重い楽器を持って、4号館、新本館、旧本館、院棟などを渡り歩かなくてははいけなかったとか。

演奏に使用する楽器はクラシックギター、マンドリン（高音）、マンドラ（中音）、マンドセラ（低音）、コン

トラバスの5種類。過去に部員の数が多かった時期もあり、所有している楽器の数は豊富。楽器の購入に苦勞するサークルもある中、メンバーが使用するには十分の楽器がそろっている。

一年間の演奏活動は、春、ジョイントコンサート（メインコンサート）、夏、部内演奏会、秋、共立祭（ミニコンサート）、定期演奏会（メインコンサート）。

ジョイントコンサートは、2006年度は実践女子大学、武蔵工業大学と行ったが、2007年度は工学院大学と獨協大学とのコンサートが予定されている。ますますの発展を期待したい。



ボランティア活動を通して

横井 景子

「対面朗読の会」と出会ったのは、今から十年ほど前のこと。微力ながら、視覚障がい者の方のお手伝いをしたい、というのが入会の動機でした。

活動内容は①市報・議会報・保健だより・身近な情報の収録 ②視覚障がい者の会との交流会 ③対面式朗読 ④特養老人ホーム慰問 ⑤講習会で技量の向上に努める等です。

例えば、一本の録音テープが出来上がるまでのプロセスとして、まず、原稿の取材、編集会議、原稿の下調べ、音訳練習など入念な事前準備が欠かせません。そのためには、テープを聞いて下さる方が、どんな情報を求めているのかわかるのかをキャッチし、日常生活のあ

らゆる分野にアンテナを張り巡らせる事も必要です。次に収録の際は、機械担当と音訳担当、計四名のチームワークが大切です。さらに当日までの体調管理にも気を配ります。

風邪・病氣・怪我をしないよう万全の注意を払って本番に備えます。そして、マイクに向かう時は、聞いて下さる方のお顔を思い浮かべながら一字一句丁寧に音訳していきます。こうした活動を通して感じることは、視覚障がい者の方々が様々な困難や不自由を乗り越え、実に明るいということです。また、向学心・好奇心が旺盛でパソコン、料理、音楽、旅行、展覧会等々を積極的に楽しんでいらっしゃるのです。

このように、前向きに“障がい生きる”強い精神力に接していると、何かお役に立ちたいという気持ちは思い上がりに過ぎず、逆に元氣パワーを貰い、多くのことを学ばせてもらっているということを感じます。

視覚障がい者の方にとって、白杖を頼りの外出は、不安と危険が伴います。柱などにぶつかったり、転んだり、時には駅のホームから転落ということも。

白杖を持った方に「何かお手伝い致しましょうか?」と自然に声掛けが出来たようになったのもこの活動から学び得た事の一つと言えます。

“声のたより”を通して知り合った仲間が、お互いに学び合う場として、今後も地域に根ざした活動を続けていくことが会員の願いです。

(昭和41年卒)

編集後記

★神谷くに子氏による「文芸サロン講座」の俳句についての講義を機に、次号から会報の紙面に「俳句・短歌」の投稿欄を設ける事になりました。皆様のお力をお待ちしています。

★また、OGネットの紙面を会員の皆さんの発表の場として提供できればと考えております。趣味、地域社会での活動、仕事、日常の事など、皆さんの思いを綴ってお寄せください。(酒)